研究調査報告

ギルマール写真と伊藤勝一収集首里城正殿写真

後田多　敦
（非文字資料研究センター　研究員）

はじめに

旅行家で博物学者の英国人フランシス・ヘンリー・ヒル・ギルマール（Francis Henry Hill Guillemard）一行が1882（明治15）年6月末、沖縄島を訪れている。一行は日本へ向かう途中で立ち寄り、数日の滞在だったが明治政府による接収後の首里城内も見学していた。ギルマールが沖縄で撮影した写真などの資料がケンブリッジ大学図書館に所蔵されている。この写真などは、置県後間もない沖縄の様子を伝える貴重な記録となっている。本稿ではこのギルマール沖縄写真の資料的価値について話題にしたい[1]。

ギルマール一行の訪沖については、須藤利一が「ギルマードの〈大琉球見聞記〉」で航海記の琉球に関する部分を日本語訳したほか、大熊良一「海洋調査船マーチュサ号の来航」、山口栄鉄「マーチュサ号」などでも早くから紹介されてきた[2]。近年では、小山騰（編）『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真―マーケーザ号の日本旅行―』が写真や資料を紹介し、沖縄写真については石垣忍・片桐千亜紀・中西裕見子による調査報告「ケンブリッジ大学所蔵の琉球古写真コレクション―ギルマールの見た琉球―」もまとめられている[3]。

ギルマール以前にも、琉球・沖縄では写真が撮影されている。最も古いものは、1853（咸豊3、嘉永6）年と1854年に琉球を訪れたアメリカ東インド艦隊司令官ペリー一行のものだと考えられている。ペリーは写真技師ブラウンを同行し、写真を基にしたと考えられる図版も多く残っている（写図①）。しかし、写真そのものは確認されていない。現在確認されている最古の写真は、フランス人・ルヴェルトガが1877（光緒3、明治10）年に撮影したもので、これは琉球国（藩）時代の撮影である[4]。

ギルマール沖縄写真は、現段階ではこのルヴェルトガに次いで古いものである。しかも、当時の日本は写真撮影に乾板が利用され始めたころで、乾板を用いたギルマール写真は、日本の写真技術を考える上でも貴重だ。さらに、写真を基にした図版も残り、資料としての写真と図版の関係を知る上でも興味深い事例となっている。

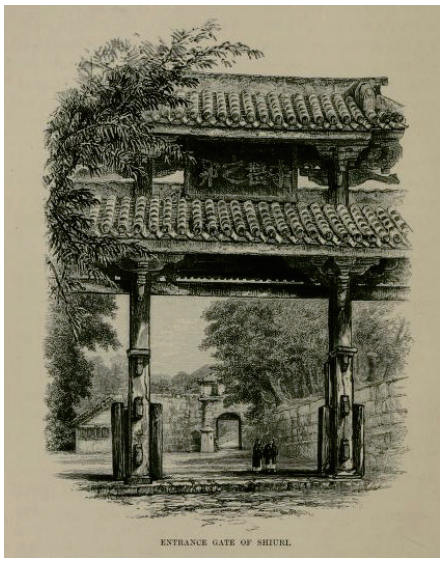
写図①：ペリー一行の琉球滞在中の様子を伝える石版画。中央にカメラと思われる機材を操作している人物がみえる。（個人蔵）

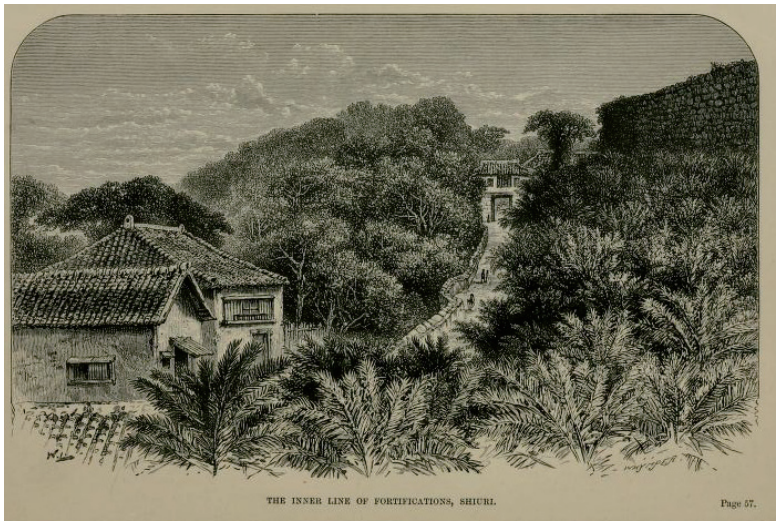
本稿ではギルマール写真と図版などを紹介しながら関連写真も取り上げ、資料的価値や情報を検討したい。特に、首里城正殿大龍柱の「原型」を置県後間もない時期に記録したと考えられる伊藤勝一収集正殿写真（現在沖縄県立図書館蔵、写図⑮、以下「伊藤家首里城正殿写真」）との関係も示したい。ただ、筆者はケンブリッジ大学が所蔵する写真をまだ実見していないことから、今後の調査に備えた覚書でもある。

ギルマール一行の沖縄訪問

ギルマールはチャールズ・ケトルウェル（Charles Kettlewell）夫妻らとともにマーケーザ号（Marchesa）＝ケトルウェル所有のスクーナー型帆船＝で1882年～1883年にかけて東アジア、東南アジアを探検した。沖縄島那覇港には1882（明治15）年6月28日（27日到着説あり）に到着し、3日間ほど滞在して横浜に向かった。横浜到着は7月4日である。

マーケーザ号での航海と探検について、ギルマールは“*The Cruise of the Marchesa to Kamschatka and New Guinea, with Notices of Formosa, Liu-Kiu, and Various Islands of the Malay Archipelago*





上左・写図②：守礼門（『マーケーザ号の航海』図版）
上右・写図③：写図②の基になったと考えられる写真。奥に歓会門とその前に兵士の駐在ボックスが見える。（Cambridge University Library Add.7957/10/77）
中・写図④：中央奥に見えるのが右腋門。（『マーケーザ号の航海』図版）
下・写図⑤：写図④の基になったと考えられる写真。（Cambridge University Library Add. 7957/10/79）

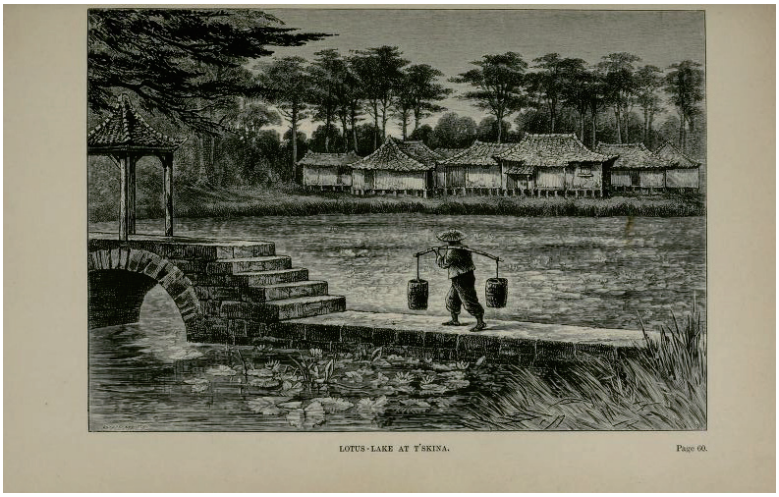
（『マーケーザ号の航海　カムチャッカ、ニューギニア、台湾、琉球、マレー諸島の島々』1886年）”（以下『マーケーザ号の航海』）を著したほか、回顧録“*The years that the locusts have eaten*（『いなごの喰った年』1932年）”も残る。また、旅行日誌や手紙も残されている[5]。

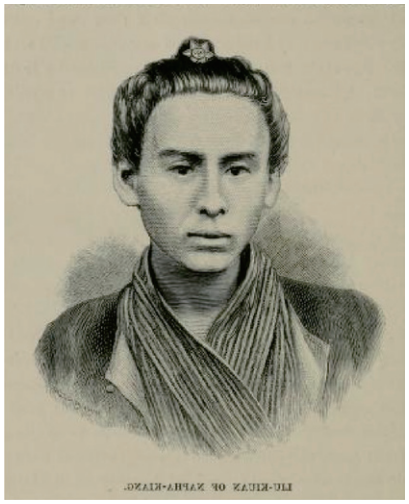
ギルマール一行が那覇港に到着した日について、須藤や大熊、小山は6月28日とし、石垣・片桐・中西は6月27日に到着、29日に離れたとする。ギルマールは台湾淡水を出発した日を6月26日と明記するが、那覇港到着日は記していないので、判断が分かれたのだろう。ギルマール一行は、魚釣群島やKomisang（須藤利一は久米島とする）を見ることのできる航路をとったようだ。そして、マーケーザ号は、慶良間諸島近くを早朝に通り、午後2時に那覇港に投錨したとある。『マーケーザ号の航海』の記述のみでははっきりしないが、ここでは台湾からの距離なども考え、那覇港に28日に到着したとする見方を踏襲したい。

ギルマールは、経由地のシンガポールで知り合った長岡護美（駐オランダ公使兼ベルギー、デンマーク公使の任務を終えて帰任途中）に、沖縄県令上杉茂憲宛ての紹介状を書いてもらっていた。上杉茂憲は1881年から約2年間、沖縄県令だった人物だ。長岡と上杉は親戚だという[6]。ギルマール一行が沖縄を訪問した際、上杉県令は東京出張中で不在だった。しかし、紹介状が功を奏したのか、日本軍（熊本鎮台）管理の首里城内への立ち入りを許され、正殿内にも入っている。彼らは国王退去後、正殿に入った最初の外国人となった（現在確認できる）。

写真と図版の関係、写真のカビ被害

『マーケーザ号の航海』には、写真を基にした風景や人物、工芸品の図版（12点）が掲載されている。しかし、首里城に関しては守礼門から歓会門を見るアングル（写図②、基になったと考えられる写真は写図③）と、右腋門を遠望するアングル（写図④、基になったと考えられる写真が写図⑤）のものしか掲載されていない。特別に入城を許された首里城内の写真や図版がほとんど見当たらないのは不自然だ。小山によると、ギルマールは沖縄で乾板を使用して撮影し、横浜で現像させたが乾板にカビが生えていたという[7]。写真の一部がカビ被害にあったとすると、正殿





上・写図⑥：那覇の風景、写真未確認。
中・写図⑦：識名園。基写真あり。
下左・写図⑧：琉球人女性。基写真あり。写真の人物部分を図版化。
下右・写図⑨：琉球人男性。写真未確認。
写図⑥～⑨は『マーケーザ号の航海』図版。

などの写真がカビ被害にあったとも考えられる。

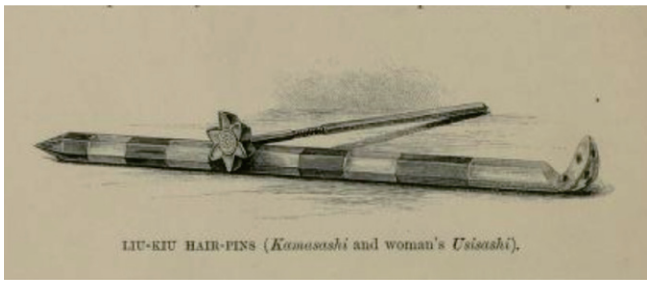
ケンブリッジ大学蔵の沖縄写真を調査した石垣・片桐・中西によれば、沖縄関係の封筒には写真26枚とスライド7枚、合わせて33枚が入っていた。そのうち同一カットを現像した複数枚があり、それを除くと写真は16種類。この16種類のうち『マーケーザ号の航海』の図版の基となった写真は12種類で、首里城関係は2種類である。

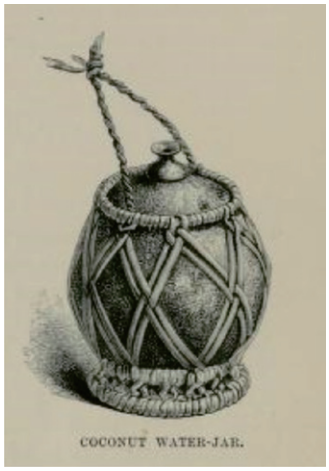
これらを総合的に考えれば、カビ被害を免れた写真の一部が『マーケーザ号の航海』図版となり、基写真などはケンブリッジ大学蔵となった。ケンブリッジ大学には、『マーケーザ号の航海』に掲載されていない城内から城下などを望む写真もあるが、退色が著しいという。これもカビ被害の影響だろうか。

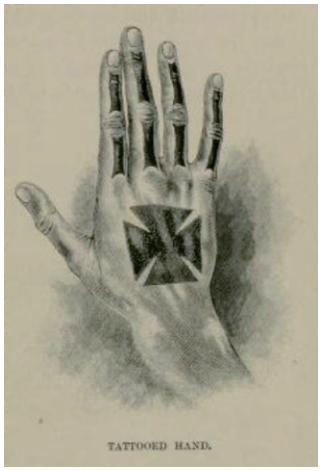
上杉博物館（山形県米沢市）の上杉茂憲県令関連アルバムから、沖縄古写真8点が確認されている。その中にギルマール撮影の守礼門写真（写図③）とほぼ同じアングルの守礼門写真がある[8]。上杉宛紹介状と首里城入城の許可など、上杉との関係や横浜での現像を考えれば、ギルマールが沖縄写真の一部を上杉に寄贈したとしても不思議ではない。上杉博物館に伝わる沖縄写真は、ギルマール撮影だと考えたい。

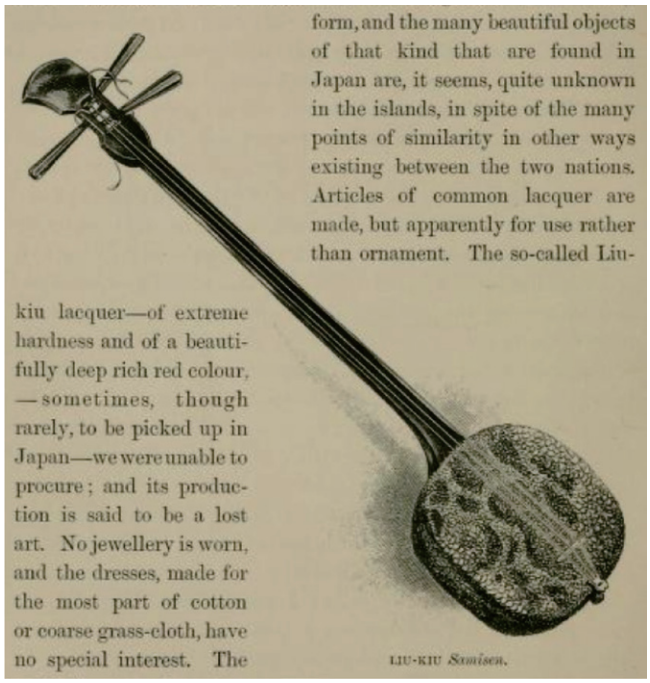
この当時、写真を印刷する製版技術は充分に確立されておらず、写真を印刷するためには印刷用の版画などが作成されていた[9]。『マーケーザ号の航海』の首里城関連図版（写図②、④）と、基になったと考えられる写真（写図③、⑤）を比べてみると、図版では人物が登場しているが、風景などは写真がとらえた光景をほぼ再現している。写図⑦と⑧、写図⑩～⑬については、基写真を確認できるが、写図⑥と写図⑨は確認できない。日本から持ち帰られ図版化された後、ケンブリッジ大学に所蔵されたものとは別の写真があるようだ。また、全ての写真が持ち帰られたのではないだろう。カビ被害で不完全とされ、または贈呈されて日本に残った写真（例えば、上杉茂憲など）もあったのではないか。

持ち帰られたが、『マーケーザ号の航海』図版にならなかった写真もある。その一つが「県知事公邸前写真」だ（写図⑭）。この写真を紹介した小山は、6月29日に「知事公邸前」で撮影されたとする。ただ当時、県知事ではなく県令なので、「県令公邸前」だろう。この写真は、極めて興味深い。注目したいの









上・写図⑩：ジーファー（簪）、基写真あり。
中左・写図⑪：椰子の実で作った器。基写真あり。
中右・写図⑫：ハジチ（入れ墨）。基写真あり。
下・写図⑬：三線。基写真あり。
写図⑩から⑬は『マーケーザ号の航海』図版から。

は洋傘を手にした女性が写っている点だ[10]。マーケーザ号の所有者ケトルウェルは旅行に夫人を同伴し、夫人は女中のボウルズを伴っており、一行には少なくとも女性２人がいた。小山は写真の女性をケトルウェル夫人（アンナ・アーネスティン・ケトルウェル）だとする。重要な情報だ。

伊藤勝一（故人）が収集した「伊藤家首里城正殿写真」（写図⑮）に、正殿石階段左側に左手で傘をさした人物が写っている。「伊藤家首里城正殿写真」は、正殿正面の大龍柱が正面を向いている写真としてよく知られてきた。市民グループの「大龍柱を考える会（会長宮里朝光・故人）」や西村貞雄琉球大学名誉教授らが1990年代から、大龍柱が正面向きだとする根拠の一つとして紹介し、向き変更を求めていた[11]。しかし、撮影者や撮影年代などが明らかでないためか、意見は採用されなかった。この「伊藤家首里城正殿写真」の背景について、ギルマールの「県知事公邸前写真」は重要な情報を提供することになる。

首里城正殿の大龍柱の向き

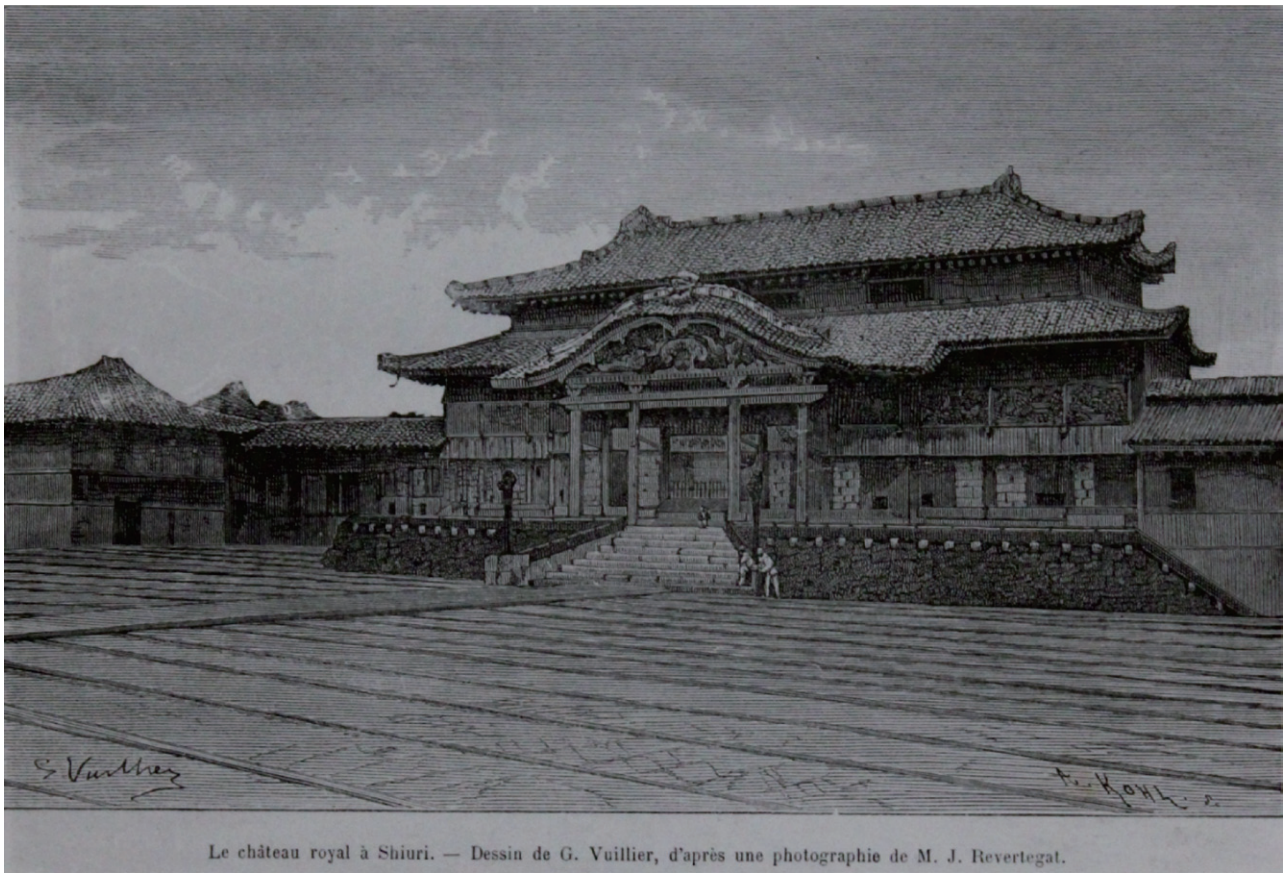
この二つの写真の関係を説明する前に、首里城正殿大龍柱の向き問題について説明しておきたい。正殿正面の石階段登り口両側には、大きな龍柱（現在は大龍柱と呼んでいる）が一対立っていた。首里城は「琉球処分」によって明治政府に接収された後、日本軍が管理・駐屯していたが、この間（1879年から1896年）に日本軍兵士が大龍柱を折り短小化させるなど、形を変えていた。そして、大正末に城内に沖縄神社が建立されると、1928（昭和３）年から正殿が沖縄神社拝殿として修復され、向きが相対向きに「改変」された。

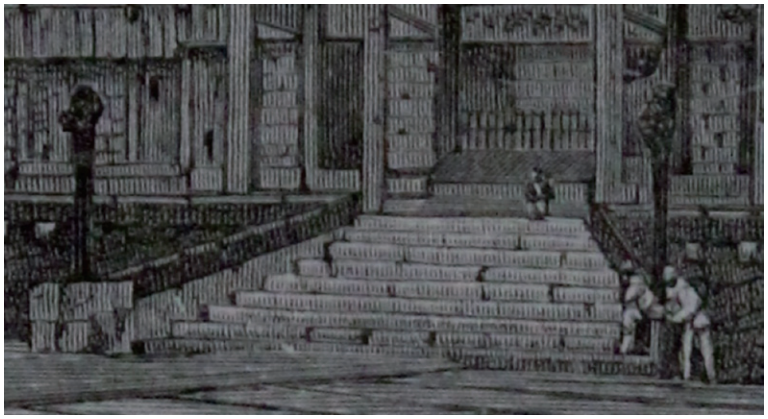
その後、首里城は沖縄戦で破壊され、戦後に復元された。その戦後の復元（1992年、以下「平成復元」）では、「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」（以下「寸法記」、乾隆33年、1768年）や昭和修復時の記録などが根拠資料となり、復元は1768年段階の琉球国正殿が基準とされた[12]。そして、「寸法記」絵図の大龍柱が相対向きに描かれていたことから、平成復元では相対向きに設置された。これに対し、市民らは御庭（正殿前広場）に向く形（正面向き）が本来の姿だと主張していた。正面向きを示す古絵図も多くあり、「寸法記」絵図は向きを示すものではないとの異論が出されていたのである。

平成復元で採用された相対説には、幾つかの矛盾がある。その一つは「寸法記」絵図の相対向きと、明治大正期の正面向きとの整合性だ。「寸法記」絵図が相対向きを示すなら、向きは正面に一度変更されていなければならない。相対説はこの変更について具体的に検証せず、日本軍駐屯時に大龍柱の向きは正面に変えられたとしていた。ところが、置県後間もない時期に撮影されたと考えられる「伊藤家首里城正殿写真」では、大龍柱は短小

上・写図⑭：手前で傘を持つ女性がケトルウェル夫人だろう。背後は「県令公邸」。（Cambridge University Library　Add.7957/10/91b）

左・写図⑮：「伊藤家首里城正殿写真」。石階段左側に傘をさした人物がみえる。（新城栄徳「琉文 21」提供）





上・写図⑯：M. Jules Revertegat（1882）UNE VISITE AUX ILES LOU-TCHOU. *LE TOUR DU MONDE*, 2, 254. Paris. の図版。基になった写真が確認されている。
左・写図⑰：写図⑯の大龍柱部分を拡大。

化以前の姿でしかも正面向きだった。そのため、市民グループは正面説の根拠として提示したのである。日本軍兵士による「向き変更」があったなら、その変更時期は「伊藤家首里城正殿写真」より古いことになり、撮影年が焦点となったのである。

「伊藤家首里城正殿写真」の撮影年の情報

「伊藤家首里城正殿写真」（写図⑮）の二つの大龍柱は、隣に立つ人物の２倍程度の高さがある。その背丈は短小化前の大龍柱の高さだ。この大龍柱の姿から判断すれば、写真は大龍柱の短小化以前に撮られたことになる。大龍柱は、日本軍兵士によって 1896（明治 29）年ごろまでに折られた後、つなぎ合わされて短小化された。この破壊行為は段階的で、先に右側（正殿に向かって）が折られていた。右側が折られ損壊し、左側が残る写真が存在するので、大龍柱は二つが同時に折られたのではないことが分かる。短小化以前の大龍柱を記録した「伊藤家首里城正殿写真」は、1896 年以前に撮られたことになる。しかも、左右両方が存在しているので、右側が折られる以前の、さらに古い時期のものだ。だた、具体的な撮影時期が明確でないという難点があった。

これがギルマール写真なら、撮影時期が特定される。ギルマールが 1882 年に首里城内で写真撮影したことは、資料から確認できるからだ[13]。ギルマール写真で正殿などが確認できなかった理由は、カビ被害だったのだろう。また、カビ被害だけでなくほかの理由で日本に

残ったものがあった。その一つのグループが上杉茂憲県令関連アルバムの沖縄古写真であり、また「伊藤家首里城正殿写真」だと考えたい。

「伊藤家首里城正殿写真」をギルマール写真だと考える決定的な根拠は、正殿石階段に傘をさした人物が写っていることだ。その人物は「県令公邸前写真」（写図⑭）で洋傘を手に写っていたケトルウェル夫人だろう。だとすれば、「伊藤家首里城正殿写真」の撮影は1882年6月となる。この時は置県後間もない時期で、日本軍が首里城に駐屯し、一般の住民は自由に入れない。しかし、ギルマールやケトルウェル夫人らは許可を得て首里城内に入っていたので、正殿正面石階段に立ち写真に収まることができた。「伊藤家首里城正殿写真」に写る大龍柱の姿からも、1882年6月の撮影として矛盾がない。

『マーケーザ号の航海』には大龍柱について、“We passed between the two huge stone dragons guarding the entrance, and found ourselves within the sacred precincts”との記述があり、ギルマールが訪問した際、大龍柱が二つ存在していたことも確認できる[14]。しかも、huge stone dragonsと大きさを強調した記述となっていて、短小化前の姿を見たのだろう。1882年に訪れたギルマールを撮影者としても、予想される大龍柱の姿と矛盾しない。

「伊藤家首里城正殿写真」の左右の大龍柱の側には背丈を比べるようにそれぞれ人間が立っている。そして、大龍柱は左右とも側に立っている人物の2倍ほどの高さだ。『マーケーザ号の航海』の大龍柱の記述が大げさでないことも分かる。

これらを踏まえて、「伊藤家首里城正殿写真」は1882年6月末、ギルマールが撮影したものだと判断したい。「伊藤家首里城正殿写真」は日本に残ったギルマール写真の一枚で、それが上杉家とも別のルートで現在に伝わったことになる。ギルマール写真だとすれば、現在確認できる置県後最初の正殿写真だ。正殿大龍柱は1882年6月末の段階で、へし折られずに正面向きで立っていた。大龍柱の姿は1877年に撮影されたルヴェルトガ写真と同じである（写図⑯、⑰。基写真については注3）。

「伊藤家首里城正殿写真」が1882年の撮影であり、ルヴェルトガ写真との連続性のなかで理解することで、この写真は重要性を増す。大龍柱は1877年5月と1882年6月で同じ姿（正面向き）だった。この事実は、日本軍（熊本鎮台）が1879年3月の首里城を接収駐屯する前から、大龍柱は正面を向いていたことを意味する。日本兵は大龍柱をへし折りはしたが、その向きまで「改ざん」してはいなかった。「伊藤家首里城正殿写真」は大龍柱の向きについて、重要な情報を提供する一級資料だと位置づけることができる。

もう一点、「県令公邸前写真」は別の点からも興味深いものだ。写真には、新しさを感じさせる建物と板塀を背後にし、ケトルウェル夫人ら訪問者を取り囲むように大勢の住民が写っている。この写真が撮られた1882年は、旧琉球国三司官（最高幹部）の富川盛奎（中国名・毛鳳来）が、仲間を伴って清国へ亡命した年である。彼らの亡命が発覚し、内務省へ提出された報告書の日付は6月24日。また、富川が5月7日に清国福建へ到着していたとの報告が、沖縄県から8月22日付で内務省へなされている。ギルマール一行が到着した6月末は、旧琉球国最高幹部らの亡命騒動の最中だったのである[15]。

写図⑱：富川盛奎（中国名・毛鳳来）旧琉球国最後の三司官の一人。琉球国滅亡後は一時、沖縄県顧問となったが辞職し1882年5月ごろ清国へ亡命。ギルマールが訪れた時期は、その密航が露見したころ。富川は5月に福州へ到着。仲間と合流し、福州や北京を拠点として救国運動をつづけ、1890年に清国で没した。

琉球国最後の国王尚泰は1879年5月に東京へ連行されている。3人の三司官（浦添朝昭、富川盛奎、与那原良傑）のうち、与那原は尚泰に同行した。明治政府への抵抗は、沖縄に残った浦添と富川が中心となっていた。置県後、浦添が拘束されたこともあり、2人は一時県顧問となり「面従腹背」に方針転換していた。しかし、その後富川は県顧問を辞めて、ギルマールらが訪れた1882年に亡命し、清国で活動する仲間と合流している。（浦添の消息ははっきりしないが、このころ亡くなったとの資料もある）。富川の亡命後、沖縄から清国への亡命者が続出することになった。「県令公邸前写真」が記録した群衆や人々の様子にも、置県後の沖縄社会の「空気」も感じることができるだろう。

おわりに

最後に何点か再確認しておきたい。まず、ギルマール写真や関連資料の重要さである。特に「県令公邸前写真」は、置県後間もない転換期の沖縄の人々の姿を記録している点で貴重だ。まさに、旧琉球国最高幹部だった富川盛奎が清国へ亡命した年の沖縄の光景である。加えてこの「県令公邸前写真」によって、「伊藤家首里城正殿写真」が大龍柱の原型を記録する貴重な写真3点のうちの1点であることが裏付けられたことだ。現在確認できる大龍柱の原型をとらえた写真は、ルヴェルトガ正殿写真（撮影年は1877年）と東京国立博物館蔵の

正殿写真（撮影年不明）、そしてこの「伊藤家首里城正殿写真」となる。

「伊藤家首里城正殿写真」の撮影時期が確認できたことで、琉球国（藩）末期のルヴェルトガ写真と置県直後のギルマール写真とを時間軸で見ることが可能となり、正殿大龍柱が正面を向いたまま「琉球処分」の激動を乗り越えていたことも確かめられたのである。ギルマール一行が外国人として置県後の首里城に入れたのは、幾つかの幸運が重なっていたからだろう。一つは、長岡護美に上杉茂憲県令宛ての紹介状を書いてもらえたこと。そして、不在ではあったが当時の県令が開明的な上杉だったことも幸いだった。それは沖縄古写真が上杉県令関連アルバムに残った背景の説明としても言えることかもしれない。

「伊藤家首里城正殿写真」の持っている意味や重要性は、首里城や琉球史に関心を持つ市民や一部の研究者から、これまでも繰り返し提起されていた。その点でいえば、ギルマール写真との関連以外、本稿が見出した新しい内容は少ないかもしれない。それでも、ギルマール写真と合わせて理解することで、情報はさらに明確になったといっていいだろう。ギルマール写真と「伊藤家首里城正殿写真」を一つのグループとして見ることで、大龍柱の向きについてだけでなく、置県直後の沖縄社会の「雰囲気」も受け取ることができる。いずれも重要な情報だということになる。

【注】

(1) ギルマールの資料については、小山騰（編）『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真―マーケーザ号の日本旅行―』（平凡社、2005年）を参照。本稿は後田多敦「ギルマール写真と首里城正殿（上・下）」（『沖縄タイムス』2021年1月27日、28日）に加筆したものである。ギルマールと乗船していた船は、かつて「ギルマード」「マーチュサ号」と表記されてきたが、本稿では近年の表記に従った。
明治政府は1872（明治5）年、琉球国王尚泰を藩王に封じ、琉球国併合へ具体的に着手し、1879（明治12）年に沖縄県を設置した。この間は一般的に琉球藩だとされるが、藩の実態は存在しないので、近年では「琉球藩は存在しない」とする見方もだされている（波平恒男『近代東アジア史のなかの琉球併合』岩波書店、2014年など参照）。

(2) 大熊良一『異国船琉球来航史の研究』（鹿島出版会、1971年）243頁以下。須藤利一『異国船来琉記』（法政大学出版局、1974年）177頁以下。山口栄鉄『琉球―異邦典籍と史料』（月刊沖縄社、1977年）133頁以下。

(3) 小山騰については前掲。石垣忍・片桐千亜紀・中西裕見子「ケンブリッジ大学所蔵の琉球古写真コレクション―ギルマールの見た琉球―」（『博物館紀要』第9号別刷、沖縄県立博物館・美術館、2016年）。本稿は小山や石垣らの研究成果に多く学んでいる。

(4) ルヴェルトガによる写真については、乗船した船の艦長の子孫エルヴェ・ベルナール氏（=Hervé Bernard、アンリ・リウニエ艦長の子孫）が所持し、「NEPTUNIA」260号（2010年）に執筆した論文のなかで掲載紹介した。フランスの琉球研究者パトリック・ベイヴェール（Patrick Beillevaire）氏の論文 «Présences françaises à Okinawa : de Forcade（1844-1846）à Haguenauer（1930）»（沖縄に滞在したフランス人たち―フォルカード（1844-1846年）からアグノエル（1930年）まで）でも紹介されている。ただ、日本・沖縄側ではその意義が注目されていなかった。
熊谷謙介「1877年の首里城訪問―フランス人が見た琉球（上・中・下）」（『沖縄タイムス』2020年11月20日、21日、22日）、後田多敦「確認された首里城最古の写真」（『沖縄タイムス』2020年11月26日朝刊）、後田多敦「ルヴェルトガの正殿写真」（『琉球新報』2020年12月1日朝刊）を参照。

(5) Guillemard, F. H. H., 1886, *The Cruise of the Marchesa to Kamschatka and New Guinea, with Notices of Formosa, Liu-Kiu, and Various Islands of the Malay Archipelago*. London ; John Murray. ギルマールの資料などについては、前掲・小山『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真』参照。

(6) 前掲・小山『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真』181頁。長岡護美は旧熊本藩主の細川韻邦の弟。

(7) 前掲・小山『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真』182-183頁。220頁。

(8) 『沖縄タイムス』（2016年2月6日）、『琉球新報』（2016年2月6日）の報道など参照。

(9) 東京都写真美術館編『日本初期写真史　関東編』（東京都写真美術館、2020年）の「初期写真抄史」など参照。石黒敬章『こんな写真があったのか』（角川学芸出版、2016年）の126頁以下に明治期の沖縄写真も紹介されている。

(10) 前掲・小山『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真』181頁。

(11) 『琉球新報』（1993年3月27日付）。当時、「大龍柱を考える会」（宮里朝光会長）が龍柱の向きを正面向きへ変更することを求めていた。宮里朝光は既にこの写真の重要性を指摘している。（創立30周年記念誌編集委員会編『首里城復元期成会記念誌　甦った首里城』首里城復元期成会、2003年、177-180頁）。

(12) 「寸法記」など一連の資料は『首里城関係資料集』（沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部、1987年）に収録。相対説は高良倉吉「大龍柱の向き」（『琉球王府　首里城』ぎょうせい、1993年、161頁）、「首里城正殿の大龍柱の向きについての覚書」（『首里城研究』No. 1、首里城公園友の会、1994年、25頁以下）、首里城復元期成会編『甦る首里城：歴史と復元』（首里城復元期成会、1993年）など参照。正面説は西村貞雄「龍柱について」（『琉球大学教育学部紀要第一部第二部（33）』琉球大学、1988年、135頁以下）など参照。

(13) 前掲・小山『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真』182頁。

(14) *The Cruise of the Marchesa to Kamschatka and New Guinea, with Notices of Formosa, Liu-Kiu, and Various Islands of the Malay Archipelago*. p58. 1881（明治14）年段階での正殿大龍柱について記述した『沖縄県史料　近代4　上杉県令関係資料』（沖縄県教育委員会、1983年、474頁）などもある。

(15) 「沖縄県士族富名腰朝衛外八名清国へ脱走ノ件」「沖縄県士族富川盛奎清国へ脱走ノ件」「富名腰朝衛与那嶺真雄清国へ脱走ノ件」（『沖縄県史12』琉球政府、1966年）832、833頁。843、844頁。847-852頁。